

世界防災フォーラム／防災ダボス会議@仙台 2019 仙台市主催セッション  
「東日本大震災メモリアルシンポジウム～経験をつなぐ、その意味とその姿～」  
開催結果概要

1. 日時 令和元年 11 月 10 日（日） 11：00～12：30
2. 会場 仙台国際センター会議棟 大ホール
3. 主催 仙台市（まちづくり政策局防災環境都市・震災復興室）
4. 入場者数 230 人
5. 構成・登壇者
  - 市長あいさつ 仙台市長 郡 和子
  - 仙台市中心部震災メモリアル拠点の検討状況  
中心部震災メモリアル拠点検討委員会 副委員長／東北大学大学院工学研究科 准教授  
本江 正茂 氏
  - パネルディスカッション
    - モデレーター 多摩美術大学美術学部情報デザイン学科 教授 港 千尋 氏
    - パネリスト 作家・詩人 池澤 夏樹 氏  
広島平和記念資料館 前館長 志賀 賢治 氏  
リアス・アーク美術館 副館長 山内 宏泰 氏
6. 内容

仙台市では、市中心部における震災メモリアル拠点の設置に向けた検討を進めており、その一環として当シンポジウムを開催しました。

シンポジウムでは、「東日本大震災が社会に何をもたらしたのか」、「世代を超えて何をつなぐべきか」、「つなぐために必要な取組みは何か」など、災害の記憶や経験をつなぐ根本的な意味を考えるため、中心部震災メモリアル拠点の検討状況の報告に続き、パネルディスカッションを実施しました。

中心部震災メモリアル拠点の検討状況については、本市全体のメモリアル事業の検討経過や、これまでの検討委員会や市民参加イベントで様々な意見が出ていること、またその中でも、災害文化をキーワードとした基本的方向性ととも、拠点の役割として「(1)多様な経験の共有・蓄積・発信」、「(2)新たな知恵の創造と社会への実装」、「(3)超長期の記憶の継承」、「(4)広域的な連携」の4つを整理したことを、検討委員会の本江正茂副委員長より報告いただきました。

また、パネルディスカッションでは、はじめにパネリスト3名に災害や戦争における記憶や経験の継承に関する取組みや考えを発表いただき、その後に意見交換を行いました。

た。

リアス・アーク美術館副館長の山内宏泰氏からは、津波常襲地の三陸沿岸にある美術館固有の立ち位置から、東日本大震災の発災直後に始めた被災状況調査、被災物の収集と常設展示の実施、また、その目的が新たな価値観「自然と分け合う生き方」の創造であることなどを発表いただきました。

広島平和記念資料館前館長の志賀賢治氏からは、同館の成り立ちから、時代による発信するメッセージの変遷、直近の大規模な展示リニューアルで重視した「被爆の実相を人間的惨状として伝える／当事者感覚」、通常の経年劣化を遥かに上回る劣化が課題であることなどを発表いただきました。

作家で詩人の池澤夏樹氏からは、修学旅行で東日本大震災の被災各地を訪れ、場所毎の様々な体験を通じた教訓の継承や、被災自治体職員による被災地ガイドの実施など、東日本大震災の経験を伝承する具体的なプランとともに、意見交換の中で、東日本大震災の大きさを体感できるような碑も必要ではないかとの提案をいただきました。

その後、多摩美術大学美術学部教授の港千尋氏をモデレーターとしてパネルディスカッションは進み、「今後議論されていくメモリアル拠点にとって言葉・物・場所の3つが主要な要素となるのではないか」、「過去に起きたことを過去として残すだけでなく、未来に対してどのように身体化し、体の中に残していくのかが重要」など、中心部震災メモリアル拠点に関する新たな観点をいただきました。

## 7. セッションの様子



会場の様子



郡和子 仙台市長あいさつ



中心部震災メモリアル拠点の検討状況を報告する検討委員会の本江正茂副委員長



パネルディスカッションの様子



モデレーターを務めた多摩美術大学美術学部教授の港千尋氏



リアス・アーク美術館副館長 山内宏泰氏



広島平和記念資料館前館長 志賀賢治氏



作家・詩人 池澤夏樹氏